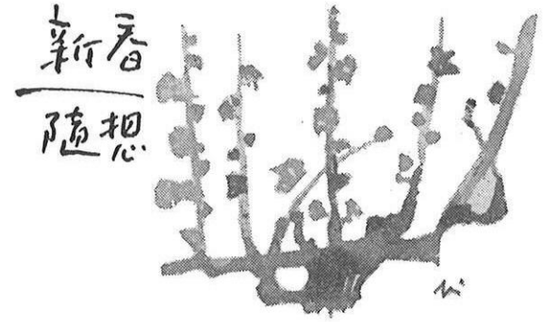

よそもんの熊本正月

□

山本捨三

しみとほるあかとき水にうつせみの
眼洗ひて年ほがむとす　斎藤茂吉

恵方から戸を開き、若水を汲み、……神仏を拝し、雑煮を祝ってしまうと、もうポンポンと鼓の音が静かな元日の街をにぎわわせて、御万歳楽（農夫などの副業）が訪ずれ、各戸の子供たちを喜ばせて祝っていく。琵琶湖畔幼少時の古い思い出である。

山里は万歳遅し梅の花

ではなく、ぼくの郷里では元旦早々からであった。九谷教授の話によると、熊本では猿廻わしがきたそうだが、新来のぼくは知らない。今年は在熊はや六度目の迎春、四海の波騒がしくともせめて正月だけは平穏でありたい。

来熊最初の正月には、わが家も地ごろにならって赤酒の屠蘇を祝ったが、灘の銘酒になれた舌には、珍らしいだけでピンとこなかった。夏目漱石の三四郎君は、五高時代赤酒ばかり飲んでいたそうだから、明治の学生はふだんにも痛飲していたのだろう。ものはためしとぼくも試用したのだが、漱石の文はそのあとがいけない。下等な酒であると。古老や酒造家はけしからんと怒るかもしれぬ。

熊本の正月風景はよそもんのぼくに大の好奇的だったが、戦時以来の変化のためか、これという珍景にお目にかからない。

そこでつい年始客それも酒客の話になるが、土地柄仕方あるまい。最初の新年、大晦日から風邪で寝込み、年始のH君に床中から応待し、酒客撃退法かと皮肉られて弱った。なるほど、漱石は熊本の酒豪連を恐れ、小天温泉に避難して、甘からぬ屠蘇や旅なる酔心地（虚子宛）、温泉や水滑かに去年の垢（子規宛）とすましていたから。六日目だったかTさんがきてくれて、一升ペロッとあけたら途端に治った。Tさんは酔うといつも逍遙しげくNさんに逍遙学派とあだ名されるだけあって、薄暮帰路の千鳥足は飄々たるものだった。昨春はNさんに招かれたが行けず、「詩と真実」の麗女猛婦連のスイ（酔・粋）態を見逃がし残念だった。

最大の正月逸話は、三年程前の七草の頃、今は亡き喫茶「リーベル」のマダムと今を時めく女流Jちゃんの深夜の急襲を受け、酩酊のJちゃんが椅子で唐紙を破る猛者ぶりを見せたことだ。愛酒そろいの熊本に愛酒のよそもんがきて、今やセミちごろよろしく銀杏城下に文学と酒の花を咲かせたがっている。

新年を寿ぐついでに、どうぞ皆さんよろしく。

（熊本女子大教授）

迎春

田尻牧夫

島々に黒潮廻る国の春
海苔障子つぶやき背の子眠り落つ
人染めて蜜柑鞦（せ）らるる閑の中
オリオンや字（あざ）一ト廻り土龍打
雪まぶし吊玉蜀黍は風晒し

（〃鶴〃所属）

美しい村

□

山田とし

ある女流画家を訪問したとき「×××は実に美しい村で、何度か風景を描きに行った」という話が出た。熊本と宮崎の県境の山深い寒村である×××が？と私は二十年ぶりにその村を思い出して、驚いた。

○　○

トラックの車輪の跡がぽっくり二筋刻みつけられた、狭い往還を三キロも歩いて、私が母につれられて川っ淵の小学校に着いたのが八歳のとき。火災の後で生徒達は焼け残りの旧校舎で、座って勉強していたが、それは異様な光景だった。のびすぎた不潔な髪、黒っぽいきもの、暗い教場からじっとこちらをうかがっている笑わない目は、そこにうずくまった小さい動物のようだった。

その子等は竹で編んだ「かるいめど」をランドセルにし、「あしなか」というサイズの短いワラ草履をはいていた。横なぐりの雨を防ぐものは、頭からすっぽりかぶる粗い毛布……。私はここに来て初めて、自然が夏は暑さで、冬は寒さで人を苦しめるのを知った。しかし三キロの道を通うことより辛いのは、男の子等が私を待ち伏せて、悪さをすることだ。無意識下に貯えられた貧困の不満が、違和感のする私に、スポーツのようにはげしくぶちまけられる。みんなの帰る道に落ちる椿の花も私は拾えず、深い谷の上にかけられた木橋のための吊り橋を渡って帰ったこともある。

対人感情が排他的で、陰険で、性的には妙にませていたのは、子等が早くから労働力として手伝わされたからであろう。家畜がどうして子を産むか、誰でも知っていた。

大人と並んで田植えの列に入る子等は遅れがちだ。「よおいっ」という荒々しいかけ声で、勢いよく持ちあげられる田植えづなに、何度も顔をはじかれそうになる。「つな食わすっぞオ」怒声に近い声が飛ぶ。牛を使う男の大きな身振りや、真剣な顔付きで、どんなに大人の神経が尖っているかがわかるのだ。

師範学校を出たての女の先生が町から赴任して来て、子等を可哀そうと思ったのだろう。何かと町風にひきたてようと過剰な笑顔をみせるのだったが、子等はそれを嘲笑った。幾月もしないうちに「みんなは、どうしてそう悪い子なの」といって、若い女教師は泣くことが多かった。すると男の子は一層野次をとばす。自分たちの生活を変えようとするものには、けもののように食ってかかるのだ。

あるとき、私は小牛のセリ市に連れて行ってもらった。寒い午後、山に囲まれた遠い道を帰ると、そのお百姓は常になく明るかった。小牛がいい値で売れたに違いなかった。それはまだ春も浅い日のことだったと思う。私はお正月の式に着て行った赤いコートを着ていたから。

○　○

×××村を出て以来、私は名もなく貧しいこの村を思い出そうともしなかったが、画家に美しい村といわれてみると、なるほどそうだったかも知れないと、あのころは目につかなかった風景を、いまにして懐しく新しい気持で思うのである。

（「詩と真実」同人）